

知られざる赤水の天文学 ④

寄稿

長久保赤水顕彰会長

佐川 春久

「長久保赤水の天文学」の校正作業中、川口和彦氏に「紅毛眼鏡ニテ見ル日月図」の話をした。すでに「マング長久保赤水の一生」167頁に紹介したが、川口氏は見逃していた。このため、付論として追加で書いていただいた。内容の一部を紹介する。

この図は、「紅毛眼鏡」(望遠鏡)でのぞいた太陽と月の表面を描いたものである。太陽と月の模写図に、それぞれ「阿蘭陀 日」「阿蘭陀 月」と題されている。

「日」の方では、太陽本体の周りに九つのキノコのようなプロミネンス(太陽のコロナの中に見える紅炎)らしきものが描かれている。本体にはまるで花畑のようににぎやかな模様がある。「月」の図の下の方に

視野広く思考は柔軟

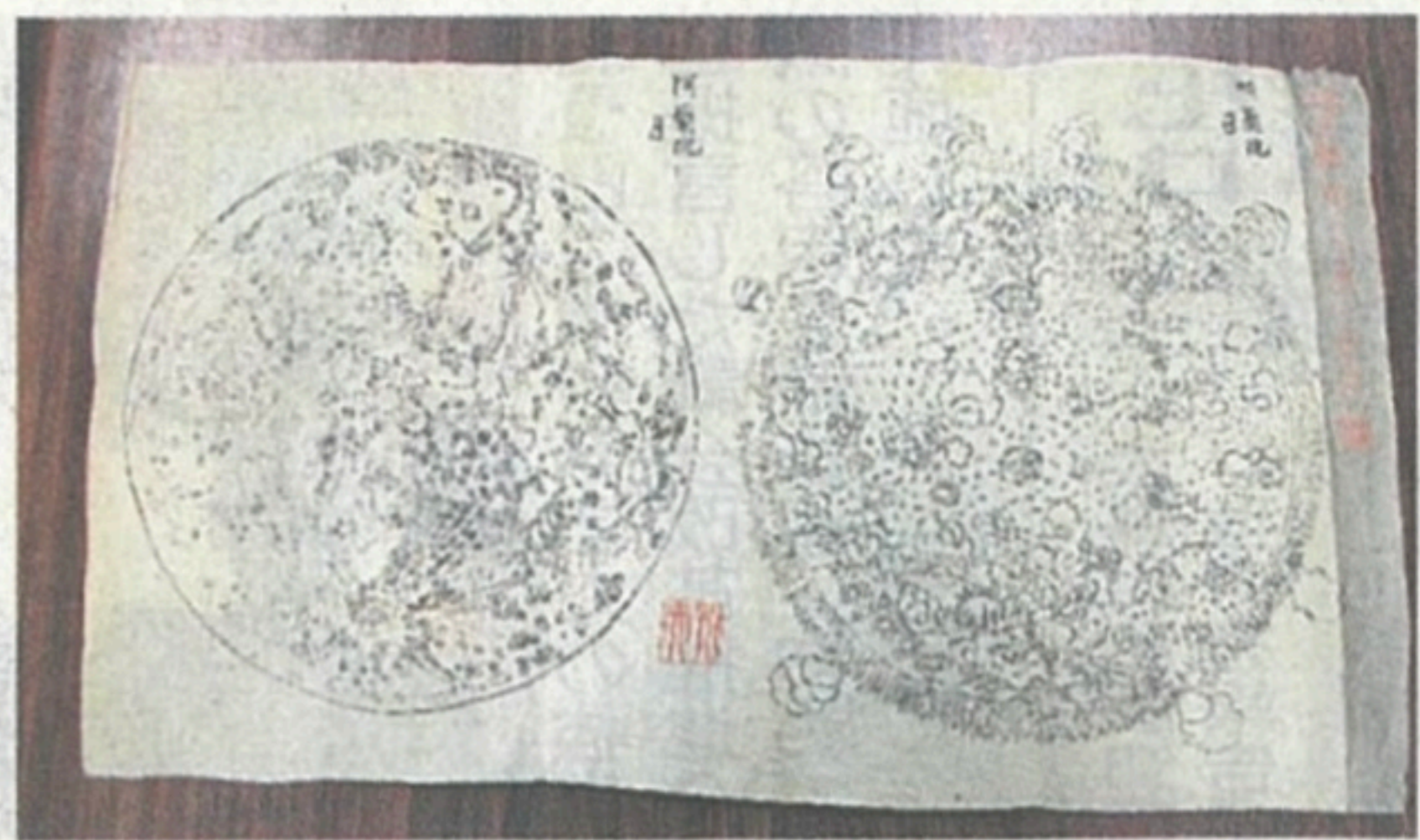
描かれているくぼみは、最大のクレーター「ティコ」、中段辺りの左側は「コペルニクス」である。

この図とほぼ同じものが司馬江漢の銅版画にある。1796年刊「日本創製銅版天球全圖」の中にある「太陽真形図」「月輪真形図」の2枚である。江漢は、1788年にひと月あまり

長崎旅行をしている。その時に平戸藩の松浦静山とも交流し、多くの蘭書を閲覧する機会を得たという。これら蘭書の中に、ドイツ出身のイエズス会司祭、アタナシウス・キルヒャー著「ムンドウス・スプテラネウ」(1664年刊 邦訳名「地底世界」)が含まれていたことが想像される。

司馬江漢の太陽の図は、キルヒャーが望遠鏡で観察して描いたものを写したことがほぼ確かである。江漢は松浦静山から閲覧させてもらい、これを描き写してたと考えられる。

また木村兼葭堂が同書を所蔵していたことから、これを閲覧したとの説もある。では長久保赤水はどこで



この図を描き写したのだらう。司馬江漢の2図を目にしたとしても、赤水はすでに80歳を越えた老域に達している。1774年、赤水58歳、脂が乗った時期に「天象管闕鈔」を出版した。この時、木村兼葭堂に初めて会っている。赤水は西洋書籍を、大変な驚きを持ってそのまま複写したものだと思われる。ただ、水戸学の大

重要文化財「文書・記録類N O・四一・長久保赤水が描いた「紅毛眼鏡ニテ見ル日月図」高萩市歴史民俗資料館所蔵(長久保甫氏寄贈)

家である赤水が、蘭書に目を通していた可能性に、赤水という人の柔軟な思想スタイルの一面をうかがうことができる。水戸学自体、幕末の志士たちに大きな影響を与えるなど、日本近代史に無視できない大きな足跡を残しているが、長久保赤水の視野の広さと思考の柔軟さは、それらをはるかに凌駕する巨視的な学問を目指していたのではないかとさえ思える。小さな型にはめてしまったのは、赤水の実像は見えてこない。(「長久保赤水の天文学」123頁参照)

(おわり)



■日立支社
日立市
高萩市
北茨城市
☎0294(22)4466
ファクス(22)4480